

---

# 冒険者かく語りき ~トレジャーハンター修行中~

小坂みかん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

冒険者かく語りき →トレイジャー・ハンター修行中→

### 【Zコード】

Z8943Y

### 【作者名】

小坂みかん

### 【あらすじ】

玉藻＆土鍋ご飯さんのWizardry Onlineのリプレイ小説「冒険者かく語りき」の外伝です。

土鍋ご飯さんと同居している私。

PCが一台しかないため、私のハル君と土鍋ご飯さんのマコーちゃんやイナンナさんが一緒に冒険するのにならうことやう…。

W i z a r d r y O n l i n e h a g a n e p o t s a n の 提 供  
す る 基 本 プ レ イ 料 金 無 料 の M M O で す。

この 作 品 は p.i.x.i.v で も お 読 み 頂 け ま す。

## 冒険開始から、初めての罠解除成功まで（前書き）

本日、初めて罠解除に成功致しました。あまりの嬉しさを記念して、土鍋ご飯さんに倣つてリプレイを書いてみました。キャラクター設定の部分はもちろん創作ですが、プレイ中の心情はほとんど素です。

## 冒険開始から、初めての罠解除成功まで

「男エルフで盗賊？何か、やつらしーい！宝箱なんかはクールに軽々罠解除しちゃって、女の子には『君の瞳は宝石のように美しい』とか言っちゃって、お宝も女の子も選り取り見取りってわけ？」

「はん。馬鹿馬鹿しい。女なんかよりも、本物の宝石の方が百万倍も美しいね。俺はね、俺のようにうつつくしい宝石様にお目にかかりたいだけなの」

「うわ、出た。ナルシスト発言。あんた、そんなんじゃあ、いつまで経っても独り身よ？」

「うむせえな、放つとけよ

ハルはかつて姉貴分とした、そんな会話を思い出しながらガックリと肩を落とし、深いため息を吐いた。そして背中にたかる虫を払いのけながら急いで立ち上ると、安全な場所へと移動しながら荷物を漁り、回復薬を煽るように飲み干した。

「ああ、くそ！また毒針食らひまつたよ！ムカつくな……」

思いがけずそう叫び、いまだ追つてくる虫へハツ当たりのよう薬瓶を投げつけると、彼は街へと戻るための梯子めがけて走り出し

たのだった。

\* \* \* \* \*

街に戻つてくると、ハルは荷物の中を覗き込み、顔をしかめさせた。戦利品は僅かな回復薬と石と、雀の涙ほどの端金。あとは装備が出来るかどうかも分からぬ靴がいくつかと杖だ。どうせ靴は自分の職業では装備出来ないもののはずだし、石はキラキラと綺麗に光り輝いてはいたが、所詮はただの石である。宝石にはほど遠い。

この石を大量に集めると宝箱の鍵を作つて貰えるなどという噂も聞きたはしたし、実際にそれらしい宝箱も目にしたのだが、自分の財布の中身を考えると銭に変えてしまった方が良さそうだった。彼は「…靴と一緒に、石も売っちゃまおう」と心の中でじっとりすると、杖に目をやつた。宝箱の罠解除に失敗して毒を受けつつも、何とか手にした杖だ。良いものであつて欲しい。ただ、この前石つぶてを食らいながら手にした杖は、さくくれだつてボロボロに朽ち果てた二束三文にもなるかどうかのものだった。今日手に入れた杖も同じように汚らしい。…今まで見つめていても、金にはなつてくれない。今度こそ、良いものでありますようにといつ思いを胸に、彼は道具屋へと歩き出した。

「ああーやつぱり今回もショボかつたーこんななんじゃあ、いつまで経つても装備整えらんねえよ！…」

道具屋で靴と杖を鑑定してもらつたのだが、やはり自分が装備出来ない靴と、この前と同じ杖だった。道具屋で売っている武器や装備は、いまだに宿にすら泊つた事がなければ酒場を利用した事もない自分には到底出せない価格だった。以前、姉貴分が「露店販売を覗いてみなさいよ。結構安くていいものがあることがあるわよ」を言つていたが、この街に集まつてきている冒険者は、もうかなりの手練となつてているのか、露店にも彼のレベルで装備出来るようなものは売つていない。「このままじゃあ、本当にいつまで経つても装備が整えられないから、もっと経験値も金も稼げる依頼を受けようにも受けられないし、レベルも上げられない」と彼がうなだれていると、タイミング良く郵便が届いた。姉貴分からの小包だった。

戦士をやつしている姉貴分は良い仲間と巡り会つたようで、仲間達と着々と冒険者レベルを上げていた。そのため、どんどんと低レベルの装備が要らなくなるようで、姉貴分は装備が要らなくなる度に彼に合うサイズに手直しをして送りつけてきた。たまに「最初のダンジョンで盗賊が装備出来るモノ、ゲットするの大変でしょ?」「と言つて、わざわざ露店をチェックして見つけて来てくれる。姉貴分に頼りきりなのは情けないと思いつつも、正直大変ありがたかった。ハルは装備中の「毒を受けにくくなる」という小汚い皮鎧を脱いで届いたばかりのローブを着込むと、再びダンジョンへと潜つたのだった。

\* \* \* \* \*

姉貴分からのありがたい施しのおかげで防御力も上がり、ギルド

から討伐を依頼されている盗賊団の下つ端も何とか苦労することなく倒せるようになってきた。持ち物を頂戴してみると、鎧を手にしる事が出来た。街に戻り鑑定をしてもらつてみると、以前姉貴分からお下がりで貰つたものと同じ「毒を受けにくくなる」という皮鎧だつた。既に持つている物ではあつたが、自分で手に入れたということが何とも感慨深かつた。

不用品を売り払つた金が貯まり、ようやく剣だけではあるがギルドから配給される初級冒険者用の剣から卒業することが出来た。これで攻撃力も少しは上がる。ハルは心なしか顔をほころばせると、再びダンジョンへと戻つていった。

\* \* \* \* \*

もう少し虫退治で経験値を稼ごうと思っていたにも関わらず、ダンジョンの入口付近でお目当ての虫に出会う事は滅多になかった。もう少し、奥に行きたい。そう思つていた矢先に姉貴分からまたもや小包が届いた。結構見た田の良い皮鎧と、暗器と呼ばれる、いわゆる「ナックル」だつた。暗器は両手に装備するため防御が出来ない分、身軽に動けるので攻撃の手数が増える。これなら「決戦場」と呼ばれる力試しの場もクリアして、ダンジョンの更に奥へと進めるようになるのでは。そうと決まれば、途中で放棄していく「決戦場へと続く道を拓くための仕掛けの攻略」を再開させよう。ハルはそう思い立つと、まだ押していない四つ目のボタンのある部屋へと向かつた。

しかし、思うように行かない。ボタンのある部屋に辿り着く前に、盗賊頭に殺される。何度も挑んでも殺される。初心者には神の加護があり確実に蘇生出来るとはいえ、死ぬというのはやはり気分のいいものではない。この前レベルが3になった時に盗賊業には重要な運の数値が一つ下がった。こんなに「ポコポコ」と死ぬのは、運がないからなのだろうか。そんなことを考えていると、ふとレベルが上がった時に授けられるポイントについて思い出した。新しく技を覚えたり、既に覚えている技を強化するにはこのポイントを消費する必要がある。もう少し高レベルになつたら割り振ろうと取つてあつたポイントを使って、何とか今抱えている問題をクリア出来はしないだろうか。そう思つてギルドから渡されていた「スキルツリー」なるものを広げて見てみると、既に覚えることが可能な技の一つに「ステルス」というものがあった。何でも、一定時間姿をくらませた状態になれるらしい。

「何だよ、あるじやん！？」

ハルは思わずそう声を上げると、恥ずかしそうに頬をほのかに赤らめさせた。冒険者たる者、常に注意を払えと姉貴分が口癖のように言つていたのを思い出したのだ。彼はそそくさと「ステルス」を覚えると、スキルツリーを荷物にしまい込んで四つ目のボタンを攻略しに向かったのだった。

\*\*\*\*\*

何とか決戦場への道を拓き、その決戦場もクリアしてレベルが4になつた。ダンジョンの更に奥へと進めるようになると、盗賊団の一昧の追剥ぎ男に遭遇するようになつた。こいつを五人片付けると結構な経験値と金が貰える。虫も奥の方がよく湧いた。おかげ様で、レベル3から4へと上がる時よりも楽に5へと上がることが出来た。

レベルが5に上がつてすぐのことだつた。ダンジョン内をうろついているとしている特殊な鍵が施されているわけでもなさそな未開封の宝箱を発見した。…今日こそは、宝箱の罠解除を成功させたい。そう思つて宝箱の前にひざまづくと、追剥ぎ男に見つかつた。

「宝箱！宝箱に集中せりよーつゝとおしゃーー！」

田の前の折角のお宝が他の冒険者に持つて行かれるところを想像して苛々としながら追剥ぎ男を殴り倒すと、ハルはいそいそと宝箱の前へと戻つた。この前はどんな罠か見定めは出来ていたものの、罠を解除出来たという手ごたえが低く、ままよとばかりに鍵を回してみたら案の定失敗した。その前はどんな罠か見定めている間に罠が作動してしまつて失敗した。だから、慎重に、慎重に…。動悸が激しくなり、呼吸が荒くなるのを抑えながら見定めを続けていると、今までに感じた事もないような手ごたえが得られた。

(これなら、いけるか…?)

はやる気持ちを抑えつつ、ゆっくりと宝箱の鍵を回す。カチリと

「うわー！そ！開いた！罠が作動せずに開いたよ！…なんか、ようやくシーフを名乗れる気がするよー！つわーー五つも物が入ってる！」

「すっげーーー！」

彼は大はしゃぎしながらいそいそと宝箱の中身を荷物へとしまい込むと、あともう少しでミッション達成となる追剥ぎ男の討伐と虫退治を手早く終わらせ、意気揚々と街へと帰つていった。

\* \* \* \* \*

ルンルン気分で街へと戻つてきた彼を待つていたのは幸福な気持ちはなく、落胆だつた。鑑定の結果、宝箱に入つていたのは例の毒に強い小汚い皮鎧と、壊れた剣と盾、装備品に装着させると体力が微量に増えるという不思議な石、それから毒消しの薬だつた。体力増加の不思議な石は試供品でギルドから貰える物の方が質がいい。だから正直、売りとばした方が嬉しい気分になれる。まあ、冒険なんてそんなもの。そのうち挑戦できるダンジョンも増えて、もっといいものも手に入るさと肩を落としていた彼は姉貴分からの手紙を読んで更に機嫌が悪くなつた。

冒険者には冒険者としてのレベルの他に魂の成長度合いを表した「ソウルランク」というものがある。手紙によると、姉貴分は既にソウルランクが4になつたとのことだった。レベルがどんどん引き離されるのはまだいいとして。癪にさわるのは「カイ」だかという

仲間の戦士だ。どうやら姉貴分は蘇生に失敗して灰になつた際にこの戦士に助けられ、それ以来、彼のことが気になつてゐるらしい。今まで自分を心配してくれ気遣つてくれる内容だったのだが、今となつては自分がカイがどうしただのこうしただのという内容で埋められた手紙を思わずクシャリと握りつぶすと「だから、カイって誰だよ！」とハルは叫んだ。

一番盗みたかったアメジストを、見知らぬ戦士に奪われかけている。冒険者としての道のりはまだ遠く長い盗賊の目の前に、大きな難問がまた一つ立ち塞がつたのだつた。

## 冒険開始から、初めての眼解除成功まで（後書き）

…最近、土鍋「」飯さんが田の前で「カイさんが」「カイさんが」言う度に、本当にイラッと来るようになつてきました。ちくしそう、出来ることなら、人狩りしてやりたい…。でも、私は良い子なので、犯罪には手を染めないんだもん！ふーんだ…はあ、カイさんなんて気にしないで、自分のペースでゆっくりレベル上げよつと…。

## 小嘶 数値とHIEON（前書き）

もう寝ようと思ひ、土鍋ご飯さんにPCを明け渡したら、ハル君的には事件と呼べることが起きました。なんか、寝付けなくなつてしまつたので、何となく投稿します。ちなみに、数値関連についてはネタバレを含みますので、まだ最初のダンジョンをクリアしてない人は「回れ右」をお願い致します。

ハルは街に戻つてくると、何とはなしに財布にしまつてあつた冒険者証を眺め、思わず「え！？」と声を上げた。レベル4から5に上るのは案外楽だつたのにも関わらず、5から6に上がるために現在蓄積されている経験値の倍は稼がないといけないということが冒険者証の指標には表示されていた。

「えー……うそ、あと2200つで、追剥ぎ男で換算したら22回分？ダンジョンひきこもいたらアツと言つ間に貯まるかなあ？」

そのように呟きつつ眉間に皺を寄せながら冒険者証と睨めっこしていると、彼はある数値が変動していることに気がついた。自己の属性を表す表示のところの「秩序」の項目が若干ながら増えていたのである。

属性というのは何かしらの職業に就く際などにも関係する、いわゆる自己の「人柄」のようなもので、三種類に分けられる。「秩序」と「中立」と「混沌」だ。秩序は分かりやすく言うと「真性のイイ人」で、中立は「世の中には白黒だけではなく、灰色というものが存在する」ということが分かつていて、「まあどちらかというと普通の人、そして混沌は「良くも悪くも個性的」とでも言おうか。ちなみにハルの属性は中立で、姉貴分は混沌だ。姉貴分とよく行動を共にしているというリリアというプリーストも姉貴分と同じく混沌属性だと聞いたことがある。姉貴分から聞いた限りの彼女はとてもおっちょこちょいで、ほぼ全ての罠に引っ掛けたり、ドジを踏んだのを可愛らしい笑顔で誤魔化す割には腹黒いらしい。姉貴分もしつ

かりしているようでかなり抜けているところがあるのを思い出した  
ハルは「混沌属性って、もしかしてドジの別名?」と首を傾げた。

そのようなわけで各自「属性」というものを持ち、それも冒険者  
レベルと一緒に記載されているのだが、ハルの冒険者証には今まで  
0と記載されていた「秩序」の欄が10となっていたのだ。そして  
100だったはずの「中立」も110に増えている。

(俺、何かしたつけなあ…?)

宙に視線を投げながら今までの冒険を思い返してみたハルは、あ  
ることを思い出した。ダンジョンの中で一度ほど、ギルド以外の依  
頼を受けた事があったのだ。そして、その依頼を達成した際に依頼  
主に質問をされ、何とはなしに返事をしたことがあった。大切にし  
ていた人形を落としてしまったという男の代わりに人形を探してき  
た時には、その人形が本当に大切にされていて、彼にとつては珠玉  
の宝石のようなのだろうというのが伝わってきた。だから「その人  
形、あんたに愛されてるな」と笑って人形を手渡してやつた。また、  
暗闇でペンダントを落としたという男の代わりにペンダントを探し  
てきた時には、「暗闇の方が落ち着くよね?」と聞かれて「日向も  
暗闇も好きだけど」と答えた。暗闇にはここそこに危険も潜んでは  
いるが、ひつそりとお宝が眠っていることもある。そして陽の下では  
は、姉貴分が愛する農作物が煌めき輝いている。だから暗闇も日向  
も、本当にどちらも好きだったから、そう答えた。どちらの回答が  
どのように数値の変動をもたらしたのかは分からなかつたが、その  
くらいしか変動の理由は思い当たらなかつた。まあ別に、このくら  
いの変動じやあ何かに影響が出るということもないしと思いながら  
冒険者証を財布にしまうと、ちょうどまた姉貴分からの郵便が届い

た。今日は小包ではなく、手紙だけだった。

手紙によると、姉貴分はパーティーの仲間と「ユニオン」と呼ばれるものを作つたらしい。パーティーとはまた違う、ギルドの依頼を効率よく攻略するために気の合つ仲間で集まつた「同盟」のようなものだという。ユニオンを作るにあたつて登録料として三万という大金が必要になるそうなのだが、姉貴分はうつかりとんでもない名前で登録を行つてしまい、慌てて登録破棄したということだつた。うつかりミスで大金を失いうなだれていると、いつものメンバーがやってきて一緒に資金調達をし直してくれたそうで、なんとか無事にユニオンを立ち上げることが出来たそうだ。ユニオン名は「アザルスの風」というそうだ。この大陸を股にかけ、風のようにさすらい、冒険者として名を上げようという彼女達にはぴったりの名前だつた。「よかつたら、ハルも入る?」と誘ってくれたのは嬉しかつたのだが、ユニオンに入るには直接ユニオンのメンバーと面会しなければならないらしい。姉貴分とは常にすれ違いで手紙でしかやりとりが出来ず、姉貴分の仲間達の顔も知らないハルは大いに悩んだ。そんな状態では入ろうにも、入れないではないか。どうやつて姉貴分と顔を合わせようかと思案しながら手紙を読み進めていた彼は、思わず顔をしかめて手紙をクシャリと握りしめた。そもそも、ユニオンを作つたのは「今日もカイと会えるかと思つたら、彼、一向に街に顔を出さなくて。ユニオンを作つておけば専用の掲示板も使えるから、『いつなら一緒にダンジョンに行けるよ』っていうやり取りもしやすくなるし」という理由らしかつた。

「だから、カイって、誰なんだよ……。」

思わずハルはそう叫ぶと、必死に辺りを見回した。どれだ。どれ

が力いつてやつだ。この街に身を寄せているのは間違いないから、もしかしたらすぐ近くにいるかも知れない。レベル的に十中八九返り討ちになることは間違いないが、それでも一発殴つてやりたい。

見知らぬ戦士を探す事を諦めたハルは不機嫌そうに鼻からフンと強く息を吐くと、姉貴分からの手紙を荒々しく荷物へと突っ込み、便箋を取り出した。そして「ユニオンに勧誘してくれるのはありがたいけど、それなら顔出せ。馬鹿角」とだけ殴り書きと、封筒に彼女がよく利用しているという宿屋の住所を書き、郵便屋に叩きつけるように手渡した。

## 小嶋 数値ヒューリン（後書き）

…というわけで、ユニオンに誘われました。ちなみに、「ユニオンを作る！」と言いだした時に土鍋ご飯さんが言っていた「ユニオンを作る理由」ですが、本当に本分の通りのことを言ってやがりました。どんだけ「カイさん」なんだよ。あ、加入するためにも、ネカフェに行くしかないのかしらん…。

## 小噺その2 リリアとの遭遇とユニオン加入（前書き）

おかげ様で無事にユニオンに加入出来ました。リリアさんを見付けられて本当によかったです。ネカフェる手間が省けました。ありがとうございます！

## 小嶺その2 リリアとの遭遇とユニオン加入

たまには露店でも覗いてみるとハルが街中とぶらついていると、プリーストのノーム娘が露店を開いていた。聞き覚えのあるユニオン名のネームプレートを付けていたのでもしやと思い声をかけてみると、彼女が噂の「ドジっ子リリア」だった。いつも姉貴分がお世話になつていますと声をかけると、向こうもこちらのことを話で聞いていたのか、明るい笑顔で返事を返してくれた。

何とはなしにそのまま彼女の隣に腰を落ち着かせて世間話をしていたのだが、姉貴分から聞いていたのとは随分と違つて、リリアはとても優しくて素敵な女性だった。…ただ、時折「ウヒ」となどと裏に何かを含んでいるような怪しい笑い方をする不思議な人でもあった。やはり、混沌属性というのはとても個性的のようだ。彼女は本当に優しくて、「よかつたらレベル上げ、手伝いましょうか?」と言つてくれた。あまりにもレベルが離れ過ぎているので付き合わせてしまうのも申し訳ないという思いと、もう少し自力で頑張りたいとこう思いから「気持ちだけで嬉しいよ。気遣い、本当にありがとうございます」と返した。いつか姉貴分と三人でどこかに冒険に行けたらきっと楽しいだろう。もっと仲良くなりたいと思っていると、向こうの方から「友達になろう」と声をかけて来てくれた。ちょうど自分も同じことを言おうとしていただけに、心なしかドキッとした。

「はい、これでウチのユニオンのメンバーですよ。よろしくね!」  
彼女はユニオンの方にも誘ってくれ、慣れない手つきで紹介状を作成してくれた。

「あ、ありがとうございます！本当に、いつも姉貴分がお世話になつています」

「いえいえー、お世話しますー」

「セレは普通『いかがわ』、お世話になつてます『じゃないの？』

笑いながらリリアにそう返すと、彼女はクスクスと笑いだした。  
「何だよ、姉貴分から聞いていたのとは全然違つて、本当に楽しくいい人じやないか。そのままつらつらとまた他愛のない会話をし、冒険者がよく陥る「金欠病」から「良い装備を手に入れんには」というような話になつた。宝箱さえ開けられたら、レア物も結構手に入るからお財布も暖かくなるのにと頬を膨らますリリアを眺めて、ふと、先日の冒険でリリアの宝箱の解錠率がパーセントだつたという話を聞いていたことを思い出した。

「ちゃんと宝箱、開けられてるじゃん。俺なんて、昨日ようやく初めて解錠に成功した駄目シーフだよ」

「ふふ、神様のご加護ですよー」

胸を張つて得意げに笑うリリアは「レベルが上がればそれだけ冒険もし易くなるし、特殊任務を受けたらどう？」とアドバイスしてくれた。期間限定でしか受けられない特殊な任務は金も経験値もオイシイらしい。彼女は折角開いていた露店を畳むと「こっちへ来て」と言って特殊任務を受注できる場所へと案内してくれた。任務

の内容を見てみると、今の自分にはかなり骨が折れそうな内容だった。とりあえず、もう少しレベルを上げてから挑んでみようか。そんなことを考えていると、隣にいたリリアがこちらを見上げて「頑張ってね！」と笑いかけてくれた。見上げられて初めて、彼女がとても小柄だということに気がついた。

「今並んでみて気付いたんだけど、ノームってすげーく小柄」

「そうなんですよー」

「ハグしたら、ジャストにスッポリ腕の中に収まりそう」

ただ単に「小柄である」ということの感想としてそう言ったのに、彼女は「きやーセクハラ！」と言いだした。慌てて「え、何で！？」とハルが声を上げると、彼女はクスクスと笑うばかりだった。

「可愛いねって話だよーー？」

「あら」

「何」

「いえ、レベル上げ、頑張ってねー」

笑い続ける彼女が本当に可愛らしくて。不覚にも、思わず「本当にハグしたい」と思ってしまった。正直、姉貴分よりも可愛げがあ

る。どうして姉貴分はこんな素敵な人のことを「腹黒」と言うのだろう? こっちの気も知らないで「カイさんが」「カイさんが」と言つてくるお前の方がよっぽど鬼畜だよ。

ハルはリリアに別れを告げると、いつもの下水道へと戻つていった。

いつかきっと、姉貴分や彼女と冒険に出たいから。とりあえず今日も追剥ぎ男退治を頑張ろ!。

## 小嘶その2 リリアとの遭遇とヨーロン加入（後書き）

ちなみに、彼女との会話文はほとんど原文ママです。ハル君が本文内で彼女に対しても結構リアル。ほ…本当にハグしたいって思っちゃったんだよね…。なんだろ、感情移入し過ぎ?これ、口ストしたら立ち直れなくなりそうで怖いわ。

えっと、とりあえず、私は危ない人ではないし、ノーマルだし、ちゃんと三次元に土鍋ご飯さんという伴侶がいるということを念押ししておきますねっ!?

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8943y/>

---

冒険者かく語りき ~トレジャーハンター修行中~

2011年11月27日16時51分発行